



私たちの家族

日本新使徒教会ニュースレター

2014年（平成26年）第11号・新使徒教会日本教区発行

The Newsletter of the New Apostolic Church Japan Number 11, 2014

〒206-0014 東京都多摩市乞田1320(本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲110番地17 Tel. & Fax. 089-994-3556

編集者：ヴォルフガング・R. アーデ Tel 090-6923-0115

矢幡 賢治 E-mail: nac_matsuyama@ybb.ne.jp

(新使徒教会国際本部ホームページ Current Word of Month より)

仕えることは証しすること

イエスはある時弟子たちと一緒にガリラヤへ行かれ、そこで御自分がそう遠くない先に苦しみを受け死ぬことになる、ということをお告げになりました。しかしマルコによる福音書によれば、このお告げが弟子たちには理解できませんでした。彼らはイエ



スがなされた奇跡を直接見えています。人々がイエスのところに集まって来た様子も見えています。彼らのうち三人——つまりペトロ、ヤコブ、ヨハネ——が変貌の様子を直接見てからそれほど時間も経っていませんでした。弟子たちがカファルナウム<カペナウム>にやって来た時、イエスは彼らに、途中で何を論じ合っていたのかをお尋ねになりました。すると彼らは、自分たちの中で誰が一番偉いのかなどということを議論していたということでした。もっとも、イエスが御自分の栄光をお示しになった時点で、弟子たちも何らかの利益を受けたはずですが——少なくとも、彼らはひそかにそう考えていたかもしれません。ですからイエスが主であり王であるならば彼らの中で一番高い位につくのは誰だろうと話していたわけですから (マルコ 9:30-34 参

照)。こんにちにおいても似たような状況があります。今の人々もほぼ同じことをしています。誰かが非常に強力な人物になろうとすると、その人と親しくなりたいと考えるのです。

私たちはいかがでしょうか。私たちは主に従い、奉仕すること

を決意しました。しかしイエス様の言われたことを理解しているでしょうか。私たちはどうして、主に従い、奉仕するのかを、考えてみて下さい。主に従う本当の動機を見つけ出したいならば、私たち自身の会話の内容を振り返ってみればよいのです。「途中で何を議論していたのか」と、イエスが弟子たちになされた問いかけと同じことを自問してみましよう。隣人について私たちはどんな発言をしているのでしょうか。非難ばかり言っているのであれば、主の言われたことが理解していないということになります。もし本当に主の言われたことを理解しているならば、隣人についての発言も違ってきます。擁護することはあっても非難することはしないからです。

では教会について私たちはどんなことを語るべきでしょうか。主が御自分の教会でなさったことについて語りましょう。教会を単なる組織として見たり、うまくいかないあらゆることについて愚痴を言うのに時間を費やしたりするのはやめましょう。主が御自分の業としてなさっていることを理解していれば、不要な議論や愚痴に費やしている時間は一切ありません。

弟子たちは、自分たちの中で誰が一番偉いのかを議論していました。自分がどれだけ大切に役に立つ存在なのかを人々に示すのに、人はなんと多くのエネルギーを費やすことでしょうか。自分がどれほど多くのことをやって来たか、自分がどれほど優れているかを示そうと、多大な時間を費やすのです。私たちは普段、自分のことを過大評価するものです。誰が一番偉いかなどという議論はやめましょう。イエスは次のように仰せになって、弟子たちの議論を収束されました「いち

ばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

すべての新使徒教会の信徒は、自らの人生をキリストの証しに費やすことによって、自分たちの知り合いに奉仕しましょう。教会ですべての人に奉仕したいと思うならば、隣人の重荷を背負ってあげましょう。教会ですべての人に奉仕しようと思うならば、兄弟姉妹が不幸に苛まれている兄弟姉妹を慰め、弱くなっている兄弟姉妹のために祈り、困っている兄弟姉妹を励まします。福音を証しすることによって、彼らの信仰が成長するようにしましょう。

神の子である私たちは、だれでもこのような奉仕をすることができます。私たちの人生を福音の証しに活用し、兄弟姉妹の思いを背負い、教会の教化啓発に貢献しましょう。

主使徒の礼拝より

(アーデ牧者より)

わたしは復活であり、命である



コンゴ・ムワンヌ＝ディトゥに向かう道

キリスト再臨後に私たちはキリストと永遠に共にいることができる、という信仰は新使徒信条に基づいています(「教理要綱」参照)。主使徒はドイツのベルリンで次のように言われました「兄弟姉妹の皆さん、私たちの今のふるまいはいかがでしょう。私たちが認識しているところですが、神様は信仰に従順である者を祝福されます。ですから新使徒信条を保持し、三位一体の神を信じます。使徒職はキリスト再臨に備える私たちにとって、なくてはならない存在です。聖餐は救いに必要です。聖餐は常に必要です。聖餐を通して

会衆の中キリストの臨在を体験できることは確かです。この環境を私たちは変えたくありません。キリストの復活と私たちの復活とを信じる私たちの姿勢は、変わることがありません。」

信仰に従順である私たちを、神がなぜどのように祝福されるかはわかりませんが、祝福して下さることを、信じることはできます。

使徒パウロにも弱点があり、しかも非難され、迫害され、苦悩にも苛まれました。パウロは、自分が個人的に望んでいたことを神様から叶えていただけなくても、神様からいただく恵みで十分であると思っていました(コリントⅡ 12:9)。

また主使徒は、バプテスマを受けた段階で古いアダムを十字架につけることを約束したことになる、と述べています。バプテスマを受けるということは、キリストによる新しい被造物になるということです。

かつてフェア主使徒は次のように言われました「道半ばであきらめたり、中途半端に済ませたりするのはなく、最後まで一貫して古いアダムを殺していこう。」

次のような内容を歌った讃美歌があります：

「春に私たちが種を蒔き、
それを収穫の時に刈り取ったならば、
私たちの働きはもう忘れられてしまうのだろうか。
いやそうではない。
種蒔きの作業からは解放されるかもしれないが、
種蒔きをしたという働きは
永遠に忘れられることはない。
…
救い主から宝を積んでいただき、
喜びの冠をいただいた時、
救い主を忠実に信じた熱心な弟子たちの働きは、
すべて永遠に覚えられていく。」

あるドイツ人作家は、死というものを、我々の誕生と同時に放たれて最終的に我々に突き刺さる矢のようなものである、と述べています。キリストは「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」と、とても慰めとなる約束をして下さいました。

愛する人が安置されている棺の前に立つ時は、惜別の苦しみを味わうこととなります。しかしキリストは希望の橋を架けて下さいます。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」この約束に私たちは一つに結ばれています(ヨハネ 11; 25)。

(Our Family2014年10月号 DIVINE SERVICE より)

主使徒、ルワンダを訪問

2014年7月17日の木曜日、ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒はオランダ・アムステルダムのスキポール空港からアフリカ東部のルワンダへと向かいました。そして金曜日の朝、主使徒のもとに恐ろしいニュースが届きました。



主使徒の乗る飛行機が離陸する数分前に、マレーシア航空 17 便が 298 名の乗客を乗せて離陸していたのです。クアラルンプールに向かっていたこの飛行機は、数時間後、ウクライナ東部で墜落し、乗客 298 名と乗員全員が死亡しました。死者の中にはオランダ新使徒教会の会員四名も含まれておりました。ノルトライン・ヴェストファーレン教区(ドイツ)を担当するシュトルク教区使徒はオランダも担当しており、金曜の朝にこの悲しい知らせを主使徒に報告しました。主使徒はルワンダの首都キガリに使徒たちを招集し、犠牲者とその家族のために祈りを捧げました。「今回犠牲と

なられた人たちは、スキポール空港で顔を合わせたかもしれないのです」と主使徒は述べ、深い哀悼を示しました。

主使徒は三日間ルワンダに滞在し、使徒及び監督の合同会議を開き、教役者及び青年たちのための礼拝を司式し、日曜日の朝にはルワンダ南西部にあるキランボで野外礼拝を司式しました。キガリからバスで五、六時間もかかるこの町に、たくさんの兄弟姉妹が集まりました。

<礼拝記録>

日付：2014年7月20日(日)

場所：キランボ(ルワンダ)

担当教区使徒：マーク・ウォル(カナダ教区)

開会讃美歌：「恵み深き主のほか」

出席使徒：ミハエル・デップナー、チチ・チセケディ、マーク・ウォル

各教区使徒；ロバート・ヌサンバ、ハンス＝ヨアヒム・ゾボトカ各教

区使徒補佐；エドワード・デグビア、ヴィンセント・ダコウア、マルセル・ムボロデ、エミール・ムペレ、キンダング・ウィンギ各使徒

説教奉仕補佐：ヌサンバ教区使徒補佐；チセケディ、デップナー各教区

使徒

言語：英語、キニヤルワンダ語

出席者総数：1,623

主を依り頼みなさい！



詩編 9 編 10(新共同訳 11) 節

**「主よ、御名を知る人はあなたに依り頼む。
あなたを尋ね求める人は見捨てられるこ
とがない。」**

皆さんとこうして共に礼拝に集えることを、私はとてもうれしく思います。主は皆さんに仕えるために、私をここに遣わされました。きょう神が私たちのために用意して下さった祝福を皆さんと共有することができ、うれしく思います。そして、ここにおられる皆さんすべてと一緒に主の日の備えができることをうれしく思います。私たちが新使徒教会の信徒すなわち神の子となったのは、日常生活において神の助けや祝福をいただきたいからだけではありません。主が再臨された時に一緒に引き上げられ、婚礼の宴に加わり、主と永遠に交わりをさせていただきたいからなのです。主は再臨の時に、刈り取りを行われます。

皆さんのご自宅にマンゴーの木があれば、あるいはトウモロコシを栽培しているならば、いつ頃が収穫期なのかがわかるでしょう。この収穫期に皆さんは何をしますか。マンゴーの木の前に立って「いや、このマンゴーは気に入らない。黒い斑点がある。これは良くない」と思いますか。一番見栄えのいいトウモロコシ

だけを取りますか。無論そんなことはありませんね！実っているすべてのマンゴーを、すべてのトウモロコシを取りますね。必ずしも見栄えが良くなくても、実ったものをすべて収穫するのは、それらが食べられるからです。見栄えが悪くても、おいしく食べられるのです！それほど見栄えの良くないトウモロコシでも、食べることができるのです。利用することができるのです。

主が再臨される時も同様で、最善もしくは最高の魂だけが引き上げられるわけではありません。成熟した魂またはこれから成熟する魂がすべて引き上げられます。主にとって活用できるすべての魂、千年の平和王国を王や祭司として補佐できるすべての魂が、御許に引き上げられます。キリストの花嫁に加わる用意ができていないすべての魂が引き上げられます。主の日に与る神の子たちは、全人類の中で最高でも完全でもありません。これから成熟していく者たちなのです。

成熟しているかどうかは、どうすればわかるでしょうか。強い信仰と真の愛によって、それはわかります。強い信仰と真の愛は成熟度を示す一つです。私たちの中で欠点のない人は誰もおりません。しかし強い信仰と、神や隣人を愛する気持ちとを、心の真ん中に置くならば、キリストの花嫁に加わることができるでしょう——千年の平和王国において、キリストが私たちを王や祭司として採用することが可能となるでしょう。誰かが私に向かって「あなたは新使徒教会の信徒ですよ。いつも私たちより立派なんですよ！」と言ってきたら、その人に向かって私は「立派なんかじゃありません！」と申し上げています。他人より立派になることが我々の目的ではありませんし、私たちが人より立派だということは決してありません！私たちは、絶えず信仰を育て、神や隣人への愛を深めることによって、主が再臨される準備をしているところなのです。信仰の育成と神や隣人への愛の醸成は、成熟度を測る基準であります。

きょうは詩編を読みました。非常にわかりやすい言葉です。神を知っている人は、神を頼ります。

聖霊は、神を知ることによって神を頼りなさい、と教えておられます。神を知るとは、神が愛の神であり

完全の神であることを知るといことです。神は愛であり完全なのです。イエスはいつも、御自分の父を愛の神と言われました。天の父が私たち一人ひとりに気を配っておられる、髪の毛一本一本に至るまで配慮しておられる、と説いておられます。それほどまでイエスは私たちのことを気にかけて下さいます！私たちの日常生活における細かなところにまで気にかけて、私たちを愛して下さいのです。

御子イエスはある時こうお尋ねになりました「あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。」そして、続けてこう言われました「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(マタイ7:9-11)。父なる神は愛の神です。使徒ヨハネは次のように述べています「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」(ヨハネ1:3:1)。

父なる神は完全です。つまり、しようとお考えのこと、しようとお望みのことを、すべて実現させることができになる、ということです。神はなさることは、すべて完全です。御自身を改善させる必要はありません。最初から正しいお方なのです。そして神は、私たち人類が救われることをお望みです——そして神は万能であるが故に人類を救うことができになります。ですから私たちは神に依り頼むのです。神は私たちを愛し、気にかけて下さる御父であります。私たちを救おうとお望みです。救うことができになり、実際に救って下さいます。そんな御父を頼らない手はあるでしょうか。

私たちは御子なる神も知っています。イエス・キリストは私たちを愛しておられるが故に、私たちの身代わりに御自分の命を犠牲にされました。私たちの代わりに死なれたのです！イエス御自身もこう言っておられます「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である」(ヨハネ15:13-



14)。イエス・キリストは私たちのために死なれたことによって私たちを愛しておられることを証明されたのです！

イエス・キリストは完全なお方であります。御自分がお望みのことを実行することがおできになります。イエス・キリストは罪を赦し、永遠の生命をもたらされます。奇跡を行うことができになります。病人を癒し、死んだ人を生き返らせました。どうして奇跡をなさったのでしょうか。この世のあらゆる苦しみを取り除くためではありません。もしそうなら、すべての病人を癒すことになったでしょうし、死んだ人すべてを生き返らせることになったでしょう。イエス・キリストが奇跡をなさったのは、御自分を信じるならば必ず助けに与れることを示したかっただけなのです。奇跡をなさった理由はただ一つ「信じる者たちに対して、罪を赦し、永遠の生命を与えることが本当にできること」を証しするためなのです。これが奇跡をなさった理由であります。

主イエスは奇跡を^{なりわい}生業にしておられたわけではありません！このことはしっかり押さえておくべきです。主イエスは私たちへの愛から、恵みと永遠の命を私たち与えようとなさったのです。ですから私たちは主イエスを頼るのです。私たちを完全へと導くのは主イエスの福音であることを、私たちは知っています。主イエスとその福音を信じるならば救われることを、私たちは知っています。

私たちは聖霊なる神を知っております。そしてこの聖霊が臆病の霊でないことを知っています！臆病ではなく、力と愛と思慮分別とを私たちに豊かに与えて下さる霊であることを知っています(テモテⅡ1:7)。聖霊は愛の霊です！聖霊の目的は私たちを強くすることであり、私たちを服従させたり奴隷のようにしたりすることではありません！聖霊の目的はただ一つです。

聖霊は神を知れと教える



礼拝前のツボトカ教区使徒補佐、ウォール教区使徒、主使徒、チセケティ教区使徒、デップナー教区使徒、ヌサンバ教区使徒補佐<左から>

それは私たちがもっと深く愛せるようになることです。この聖霊を頼りにしない手はありません。聖霊は私たちが常に物事を正しく判断できるように、私たちに知恵を与えようとされます。そして、このこと——私たちに力と愛と思慮分別とを豊かに与えること——が聖霊の願いであることを知っている私たちは、聖霊の教えに依り頼みます。聖霊は私たちに、力と愛と思慮分別とを豊かに与えようとされますが、これらは神の教会において神の僕を通して与えられます。そして聖霊による業も完全であります。

このように言うと、皆さんは「完全であります、なんておかしいよ。だって牧師の説教は不完全だし、使徒だって完全ではないじゃないか！使徒だって他の人と同様に罪人ではないか！」と反論するでしょう。しかし聖霊は、完全なのです！聖霊は、不完全な人類を通して、完全を創り出すことができになるのです。

今回の聖句には、続けて次のように書いてあります「あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない。」このことを解説するために、聖書からある一つの例を取り上げたいと思います。

カナンの女がおりました。この人は外国人で、娘の病気のために主イエスのところまで来ました。彼女は主イエスの後あとを追って、イエスに向かって泣き叫びながら「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」(マタイ 15:22)と言いました。主よ、ダビデの子よ、と呼んでいたことから、彼女がイエスのことを知っていたのは明らかです。この人こそ神に遣わされたメシア、神の御子、神の使いである、ということまでとてもよく知っていました。イエスを信じ、このお方なら自分を助けて下さる、という認識を持っていました。

私たちが助けを必要とする時に行くのは、イエスの

ところですよ。イエスが助けて下さるということを感じるのは、私たちが神のことを知っているからです。神は祈りを通して神を依り頼みます。祈っている事柄を本当に信じているかどうか、私たちはいつも確かめるべきです。神に願い求めているのに、実際にそれを信じていないならば、神からそれを賜うこともできません。祈りを口にしながら実際にそれを信じないというのは、得てしてありがちです。そしてそういう場合、神に願っていることをいただくことは不可能です。信じないで口だけで祈っている事例を挙げようと思えばいくらでも挙げられますし、皆さんも心当たりがあるのではないのでしょうか。神に助けをお願いしておきながら、同時に別人に助けてもらおうとするわけですよ。

私たちは神を依り頼みます。神を信頼します。神に祈る時は祈っていることを信じるのです。

カナンの女は主のことを知っていて、主を信じていました。それで主のところに行って「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください！」と願ったのです。これに対して主はどうなさったのでしょうか。最初は聞こえないふりをされていました。しかしこの女性も簡単に引き下がりがありません。「あれ、気づいていただけないな」と独り言を言うだけでなく、助けを求めて叫び続けたのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、助けを求めて祈っても、主は応えて下さらないのではないかと思います。何度祈っても、全く答えていただけないことはよくあるのです！訴えを神に届けるのは不可能ではないかとさえ思います。そういう時は忍耐しなければなりません。「もう神は自分のことを愛してくれないのだ。だったら自分も別の道を歩もう」などと考えないで下さい。あるいは、私たちのところに来てこう言う人さえいるかもしれません「あなたに言ったように、教会では奇跡が期待できないのですよ。どこか別なところへ行きなさい。そうすれば奇跡を体験できるでしょう！」

愛する兄弟姉妹の皆さん、主が私たちの祈りにすぐ応えて下さらなくても、忍耐している姿勢を示しましょう。信仰に忠実であり続け、絶えず祈りましょう。私たちは主を信頼しているのですから！

カナンの女の話には続きがあります。彼女は主の助けを執拗しつように求め続け、主を崇め「主よ、お助け下さい！」と訴えました。するとようやく主から不思議な返事が返って来ました「子供たちのパンを取って

小犬にやってはいけない」(マタイ 15:26)。これは厳しい内容でした。これは、御自分が遣わされたのはユダヤ人に対してであって外国人に遣わされたわけではない、という趣旨だったのです！言い換えれば、この女性はユダヤ人ではありませんから主の助けを期待することはできなかつた、ということです。

もし私がこの女性と同じような扱いを受けたとしたら、どう反応したかわかりません。きっと驚くでしょう。腹を立ててこう言ったことでしょうか「それはどういうことですか！」あいかし、この女性は謙虚でした。主から言われたことを受け止めた上でこう言ったのです「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」(27節)。この発言に主は感銘を受け、彼女の嘆願を聞き入れて、彼女をお助けになったのです。

主が私たちに理解してほしいと願っておられることは、私たちが主の助けを要求できる身分ではないし資格も無い、ということでもあります。主のところに行って、こんなことを口にする権利などないのです「主よ、私がやって良いことをすべてご覧になって下さい。今や私を助ける以外に選択肢はありません。私を救うべきなのです。私を救済しなければいけないのです！」神の助けは常に神の恵みによるものなのです！奇跡を受けるに値する人など、だれ一人いません。神の助けを受けるに値する人など、だれ一人いません。神は御自分のお望み通りのことをなさいます。神が助けるならば、それは神の恵みによるものです。皆さんが神の助けをお望みなら、神の御前に謙虚でなければいけません。受けるに値すると思ひ込んでそれを要求することはできません。私は主のところに謙虚な姿勢で詣でて、こう申し上げるのです「どうか、御心ならば、私をお助けて下さい。」

カナンの女を巡る一件で、イエスはユダヤ人とそれ以外の民族との間に区別をつけておられましたが、この女性は反発することなく、ただこう言いました「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」

私たちの周囲を見てもこうした区別は見受けられません。神がすべての人に同じものをお与えになるわけではない、ということがわかります。神から健康な体を与えられる人もいれば、与えられない人もいます。お金を与えられる人もいれば、与えられない人もいます。



子供を授かる人もいれば、授からない人もいます。なぜこうした区別がつくのかはわかりません。主も、人によってなさることが違う理由を明らかにしておられません。ここでも主は私たちに謙虚さと御自身の愛への信頼を求めておられます。たとえ不利に思われても、御自分の愛を絶やすことなく信じ続けることを期待しておられます。主は、御自分が私たちに愛しておられることを、私たちに金銭を与えることによって証明するようなまねはなさいません！私たちの身代わりとして命を落とされたことによって、御自身の愛をお示しになったのです！

兄弟姉妹の皆さん、神に、いわゆる平等——つまり、同額の財産、同数の子ども、同じ健康状態といったこと——を求めるのはやめましょう。ひたむきに謙虚であり続け「神は完全だ。理解できない時があっても神に誤りはないのだ」という認識を持ちましょう。私たちは神の愛を依り頼みます。カナンの女は謙虚な姿勢がはっきりと現れていました。彼女はこう言いました「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」彼女がほしかったのは主の助けです！それがパン屑という形態であっても、彼女にとっては主の助けに変わりはないのです！

私たちも神の助けを求めています。結局、神様がどのような方法で助けをお与えになっても、私たちにとってはすべて同じです。私たちは主に依り頼むのです！主の助けは、どのような形態であっても、最善のものです。そう考えることが謙虚さなのです。神の助けを受ける資格が私たちに無いことを、私たちは知っていますし、私たちが神の助けに与れるのはひとえに神の恵みによるものであることも知っています。私たちは神を依り頼むのです。

主はカナンの女の信仰と彼女の根気を御覧になり、

彼女にこう仰せになりました「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」さらに聖書には次のように書いてあります「そのとき、娘の病気はいやされた」(マタイ 15:28)。神の助けは御言葉の中にあるのです。主はこう言われます「聞いて、いろいろなことをしなさい。福音を実践しなさい。私に従いなさい。」すると私たちは「でも言葉だけ。」「何らかの行動が見たい。」「何かやってほしい」と思います。すると主は、御言葉を伝えてから、こうお命じになります「今言ったことを実行しなさい。そうすればわかる！」そして神は私たちの信仰と、信仰に忠実な姿勢に対して、祝福して下さいます。天の父の御国に入った時に、神がなさったすべてが良かったことを知ることでしょう。実際、神の働きは完全です。神の助けは完全です。神は、御自分を知っている人や御自分を求めてくる人をお見捨てになりません。ですから私たちも「神は本当に素晴らしいことを自分たちにして下さった」と実感できるのです！

ヌサンバ教区使徒補佐：

…弟子たちの一部が主から離れて行った一方で、主から離れずにいた弟子たちもおりました。主は御自身のところにとどまった弟子たちに向かって「あなたがたも離れて行きたいか」とお尋ねになりました。すると彼らは「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」と答え、主への確信を示しました(ヨハネ 6:67-68)。このことから明らかなのは、彼らに他の選択



肢がなかったということです。彼らは何の疑問も無く主について行くことを最終的に決断しました。彼らを取り巻く環境はよくわかりません。大事なものは、主が私たちと共におられる、ということです。周囲の環境を気にしてはいけません。周囲の環境は主の御臨在によって和らぎます。ですから、完全なるお方が先導者であることを認識しつつ、主から遣わされた人たち、私たちの前を歩む人たちについて行くことにより、主を忠実に信じ続けましょう…。

チチ・チセケディ教区使徒：

…最近娘と車で移動している時に、娘が「お父さん、地球は太陽の周りをまわっている、って知ってる？」と尋ねてきました。ここは、お父さんも物知りなんだぞ、というところを見せようと、私は即座に「ああ、知ってるよ」と答えました。すると娘も「自転と言って地球自身もまわっているのは知ってる？」と聞き返してきたので、「ああ、知っているよ」と答えました。すると今度はこんなことを訊いてきました「じゃあそんなに回っているのにどうしていつも目は回らないと思う？」今度は即答ができず、考えて、逆に娘にこう聞き返しました「そんなことをだれがおまえに教えたんだい？」すると娘は「学校で教わったんだよ」と答えました。私は娘に言いました「我々が地球上にいる間でも目が回らないようにバランスを保たせてくれるのが自然の力だね。」しかし娘は満足しませんでした。彼女はしくみを理解したいと思ったのです。私はもう会話を打ち切ろうと思い、こう言いました「こうした力をお創りになるのが神様なんだよ。」すると娘は言いました「そうだね、お父さん。神様の力はすごいね。使徒が、神様は万能です、と言ってたよ。」話はこれで終わりました。娘も、しくみを理解しようとは思わなくなりました。神の万能性をわかっていたからです。天にいます父を依り頼むことは、こんにちの私たちすべてに求められています。そして神に依り頼むためには、神を知ればよいのです。神を知ることは、神を愛することです。神を愛するためには、神をもっとよく知りさえすればよいのです…。

ミハエル・デップナー教区使徒：

…ここに最後に来た二十五年前のことを申し上げずにはられません——当時はこのような家屋がなく、

道ありませんでした。それ以来、この地域は著しく発展しました。そして同様の発展——成熟に向けた発展——が私たちの魂や生活の中にも見られることを主は期待しておられる、ということをお学びました。主が私たちに期待されていることは、一つだけです。それは私たちが変わることあります！変わらなければ完全となることはできません…。

私たちの罪を赦していただける瞬間が近づいています。罪の赦しを可能とするすべての仕組みがわかっているわけではありません。わかっているのは、使徒が罪の赦しを宣言すると——彼らはキリストから任務を委ねられているために——私たちの罪が赦される、ということだけです！…私たちに欠点があることはわかっていますし、主の恵みに与る資格がないこともわかっています。しかし、パン屑をいただいと思うのは、たかがパン屑であっても、キリストや天の父と永遠に共におらせていただくには十分だからです…

シュナイダー主使徒：

デップナー教区使徒から聖餐のお話がありました。その前に私たちは罪を赦していただきます。罪が赦される前に、一緒に主の祈りを捧げます。これをいつもの形式儀礼として暗唱するのではなく、この祈りを心から信じて表現しましょう。一同で主の祈りを捧げる時は、神に依り頼む姿勢を表します。主の祈りを捧げながら、実際には神に申し上げるのです。「御国を来らせ給え——御国に優まさるところはありません！」「御心の天に成る如く地にも成させ給え——御旨は自分の考えより優っています！」私たちは御旨に依り頼みます。神に依り頼む姿勢を次のような言葉で表現します「国と力と栄とは限りなく汝のものなれば成り。」愛する兄弟姉妹の皆さん、きょうこそ本気で、主の祈りを通して、神に全面的に依り頼む姿勢を示しましょう。こう言うのです「あなたの栄光に依り頼み、力に依り頼み、御旨に依り頼みます！」そしてその際に、謙虚な姿勢で主に赦しを願うのです。

教区使徒が言われたことを取り上げたいと思います。



ロバート・ヌサンバ教区使徒補佐



チチ・チセケディ教区使徒



ミハエル・デップナー教区使徒

私たちが受け取る聖餐のウェファアは非常に小さいです。パン屑をもらうようなものです。しかしここでも「あなたからいただいたものは、自分が喜びと幸福を得るのに十分です」と申し上げて、神に依り頼む姿勢を示しましょう。聖別されたウェファアに与ることによって、必要なすべての力に与るのです。聖餐を通していただく力によって、勝利者となれるのです！聖餐を通して強くしていただくことによって、最後の最後まで十字架を担い切ることができるのです！聖餐を通していただく力によって、何が起きようと関係なく信仰に忠実であり続けることができるのです。さらに聖餐を通して、隣人を愛するのに必要な強さをいただくことができます。これらのことを皆さんは信じますか。

聖餐を施す教役者に対して「アーメン」と述べる時、これらのことを信じる意志が表明されることとなります。そして「アーメン」と述べるということは、「はい、愛する強さをいただきました。勝利する強さをいただきました。信仰に忠実であり続ける強さをいただきました」と事実上言っていることとなります。牧師からウェファアをい

いただきましたら、絶叫するように「アーメン」と言う必要はありません。大事なのは、この「アーメン」という言葉が魂の深い所から出てくることであり、イエス・キリストの体と血をいただいた時に「はい、神から期待されていることを実行する強さを身に付けました」と意思表示できることなのです。

詩編 9 編 10(新共同訳 11) 節

「主よ、御名を知る人はあなたに依り頼む。あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない。」

神は、御自分を知る者たち、信仰、謙虚さ、忍耐をもって御自分のところに来る者たちをお助けになります。

受けるよりは与える方が幸いである

ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒は今年のペンテコステ礼拝で、この「受ける」と「与える」という相反関係に言及し、資格や権利という考え方が福音になじまないものであることを説きました。主は、御自分の命という、大きなものをお与えになりましたが、こんにちにおいてもなお、御自身の体と血という、大きなものを私たちに与えて下さいます。こんにちの社会にはステータスシンボルという概念があり、多くの人はそれを手にしがります。その思いが講じると、経済を駆使して、できるだけ多くのものを手に入れて、自分の事業、発想、財産、家屋といった市場で提供するものに対してできるだけ高額の代価を受け取ろうとします。それがうまくできた人は尊敬されます。そういう人は資産やお金を所有します。

しかし——財産であれシャツ一枚であれ——物を共有している人たちもたくさんいます。「善い行いと施しとを忘れないでください」というヘブライの信徒への手紙にある言葉を毎日実行している人たちもいます。善い行いをたくさんやって来た人たちもおります。彼らにとってキリスト教徒になるということは、与えることなのです。このような人たちがいることを理解していなければ、尊敬どころか、井の中の蛙です。

さて別の側面を考えてみましょう。それは与えることと受け入れるということでもあります。誕生日を迎えてワクワクしている男の子がいました。おばあちゃんが遊びに来るのです。おばあちゃんは誕生日のプレゼントとして孫にお金を渡しました。男の子は「おばあちゃん、ありがとう！お金持ちになったよ」と言って飛び上がっ

て喜び、おばあちゃんの頬にキスをしました。ところがそれから男の子はどこかへ行ってしまいました。男の子は自分が一番欲しかったものを手にして、他に何も欲しくありませんでした。もちろん、だれの愛情を受け入れたいと思うかを、子供に自由に決めさせることは大切です。しかしこの事例が示しているのは、何かを受け入れようとするのは、それが愛情の心のこもったプレゼントであっても、受け入れることが非常に難しい場合がある、ということなのです。

素晴らしい贈り物であっても、それを拒否するには多くの理由があります。イエスが使徒ペトロの足を洗おうとした時、ペトロはそれを断りましたが、このことを考えてみましょう。ペトロはイエスのその行為が、謙虚さを示そうとしているものと勘違いをしたのです。世界中には、素晴らしい贈り物であっても礼儀として二度はお断りし、三度目に差し出されたら感謝して受け取るという地域もあります。一方で、受け取る側の好みに合わない場合は断っても構わないという地域もあります。

もちろん、贈り物を断る正当な理由もあります。ある若い女性は、彼氏と会うたびに、指輪や腕時計などいろいろな物をもらっていました。旅行まで連れて行ってもらいました。その男性に贈り物をするような立場に無い彼女は、複雑な気持ちになりました。しかもその贈り物がすべてわざわざクレジットで購入したものだど知り、喜びが失せてしまいました。自分が金で買われたような気がしたのです。

建築部に所属する役所の人々が応接室のテーブルに贈り物が置いてあるのを見つけました。この人を尋ねてきた人たち——彼らは要望を断られていました——が事務所を出た後、この人は机の上に旅行券が置かれているのを見つけました。数日後彼は、あなたは汚職を行ったのではないか、という匿名の苦情を受けました。幸いなことに彼はその旅行券を受け取らずに上司に知らせていました。

主は私たちに、御言葉、恵み、祝福、聖礼典 sacrament という、素晴らしい贈り物を下さいます。この贈り物は受け取るべきです。この贈り物によって、すべてを与えて下さる主の愛を感じることができます。必ずこの贈り物を受け取りましょう。祝福に与ります。



神様との契約

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」イエス様は私たちに、順風満帆な人生を約束されたわけでは決してありません。事実、私たちのある兄弟も数多くの難題に対処しなければなりません。しかしそれらの難題に遭っても、彼は神の恵みが作用していることを悟ることができたのです…。

1944年、私は新使徒教会の家庭に生まれ、古い粉挽き水車の小屋の中で初めてこの世の光を見ました。以来「粉挽き水車」は私にとって切っても切れない関係になりました。ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローは次のように書いています「神という粉挽き水車の動きはゆっくりだが、確実に粉にしてゆく<=いつか報いは受ける>。」自分の運命は小学校低学年の時に決まりました。学校で倒れて以来、てんかんの症状を起こすようになったのです。この症状が出ると、先生も生徒もどうすることもできませんでした。もう一生これに悩まされ続けるのではないかと思われました。両親も医者もいろいろ手を尽くしてくれましたが、発作の苦しみから解放することはできませんでした。てんかんの発作のせいで、見習いに入って手に職をつけることもできませんでした。こうした現実を受け入れるのに何年もかかりましたが、神は私をお忘れになりませんでした。その分、一般の教育を受けることなく生活していく能力を神様からいただいたのではないかと、言えるかもしれません。

さて、私が神と交わした契約について話したいと思います。水曜夕礼拝に行った時のことでした。教区長老が教会の前に立って私のことを待っていました。教区長老は私にこう言いました「今夜あなたは執事補に任命されます。」それを聞いてすぐに私は「でも私の健康状態を御存知ですよ」と言いました。しかしそう言ったものの、しばらく考えてから「これはいい機会だ。うまく生かそう」と自分に言い聞かせました。そして教区長老に「てんかんの発作が出なくなったらお受けします」と言いました。教区長老は「使徒に伝えましょう」と答えました。それから一時間、私はとても不安な気持ちで、我を忘れていました「自分は祭壇に呼ばれるのだろうか。」しかし実際に私は使徒から呼ばれたのです。

てんかんの発作がすぐに消えたわけではありませんが、すべてが非常に早く改善されたことは確かです。教

会に招待する活動をした時や、召されて礼拝中の説教補佐をした時に、発作が出たことは一度もありませんでした。ついに私は一人の特別な姉妹と出会いました。私との結婚を受け入れてくれるまで時間はかかりませんでした。その後私は執事の職務を委ねられました。

すべてが最高の状態で運んでいました——ところがまもなく「粉ひき水車」や「確実に粉になってゆく」様子を思い出してしまいました。再び雲が地平線を覆い始めました。それは、神がどれほど多くの恵みをお与えになったか、私が本当に理解しているのかどうかを、神が試そうとしているかのようでした。もしかしたら私が横柄にならないようにしておられるのかもしれませんが。最初に、私は背中手術を受けました。様々な問題がありながらも、神はすべてを最高の状態へと導いて下さいました。

六年後のクリスマス直前に、緊急の手術を受けるために病院に入院することになりました。結腸癌でした。クリスマスなのにどうして？答えはすぐに明らかになりました。同じ病室に一人の若い患者さんがいました。医師団は、病状が改善しない場合は両足を切断しなければならぬことを彼に伝えていたのです。彼にとって、一人寂しく過ごさなければならないクリスマスイブは、最悪の夜でした。私は彼のところに行って、彼の手を取り、できる限り慰めようと思いました。二人で共に涙を流しましたが、私にとっては最も素晴らしいクリスマスの一つとなりました。私が退院して、しばらくしたある日、この青年から電話がかかってきて、両足の切断をせずに済んだという話を聞きました。とてもうれしかったです。ここで神は恵みを与えて下さったのです。

その一年半後、私は心臓の疾患に罹りました。時々鼓動が止まる病気でした。手術を受け、成功しました。奇跡です。この日まで、主は非常に多くの恵みを与えて下さいました。ですから、御子が再臨される時も、きっと私に恵みを与えて下さるだろうと強く確信しています。

神は心を御覧になる

シュナイダー主使徒は、六月にコンゴ民主共和国を訪問した際、二度の礼拝を司式し、使徒三名の引退と任命を行いました。

コンゴ民主共和国は、アフリカでアルジェリアに次いで第二位の面積を持つ国です。ここは教区が二つに分割されており、コンゴ西部をミハエル・デップナー教区使徒が、コンゴ南東部をチチ・チセケディー教区使徒が担当しています。コンゴ南東部は2013年までフランス新使徒教会が担当し、当時の担当教区使徒であったシュナイダー主使徒がよく訪れており、彼にとってなじみ深い地域であります。

6月21日土曜日、シュナイダー主使徒は南東部でチセケディー教区使徒を補佐する使徒と監督全員を招集し、会議を行いました。翌日曜日、主使徒は東カサイ州ムブジマイで礼拝を司式しました。この礼拝の様子は全国にテレビ放送されました。ですから数十万の国民がこの礼拝を見たことになります。主使徒は、礼拝の場に直接居合わせていない人々も念頭に置いてこう語りかけました「<主は>人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」(サムエル上 16:7)。さらに主使徒は、主は私たちの心を御覧になる、と言い、こう説きました「主は神と隣人への愛に満ちた新しい心を私たちに与えて下さいます。主に私たちの心をもっとたくさん捧げましょう。」

三人の新しい使徒が任命される

礼拝の中で、ミハエル・カプタ使徒、ギルバート・ラジロ使徒、ギスラン・ムカイル使徒の定年による引退が告げられました。この三名の使徒はこれまで約三十年にわたり、使徒の職務を遂行してきました。長きにわたり、主と主から委ねられた魂に愛をこめて忠実に仕えてきた、信頼の厚いこの三名に、シュナイダー主使徒は心からの謝辞を述べ、三名の引退に際して主の豊かな祝福が臨むことを祈念しました。一方で、新たな使徒が三名、任命されました。バルテレミー・ミセカ・キヤムソケ(40)、ボニファス・ヌゴンゴ・マヨンボ(52)、ジャン＝ルーク・タンガ・カウンバ(40)の各氏であります。彼らの母国語はスワヒリ語ですが、それ以外にも複数の言語が堪能です。主使徒一行——ミハエル・デップナー、ウルス・ヘーバイセン(フィリピン)、ヴォルフガング・ナドルニー(ドイツ)、及びチチ・チセケディー各教区使徒——は6月23日、ムブジマイから三時間ほど南下した所にあるムワンヌ＝ディトゥという町に向かいました。この町で主使徒は二度目の礼拝を司式し、この礼拝にはやはり数千の人が出席しました。ここで主使徒はローマの信徒への手紙8章31節が基調聖句として説教を行いました「で

は、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。」ここでパウロは、神の御旨に即した生き方をするならば、必ず神様が助けて下さる、と信徒に説いております。そして主使徒も次のように述べております「神は、きょう中にすべての問題が解消されてしまう、などという約束をなさっておりません。神は、どんな状況でも強くあり続け勝利できることを心に留めておいてほしい、と私たちに願っておられます。」



ムブジマイで始まった礼拝

もう一つのコンゴ

「コンゴ」と聞くと、たいていの人はコンゴ民主共和国を思い浮かべます。かつてザイールと呼ばれていた場所です。しかし実はもう一つコンゴと呼ばれる国があります。それがコンゴ共和国です。コンゴ=ブラザヴィルとしても知られています。北西部をコンゴ民主共和国と接しておりますが、まったく別の国です。コンゴ共和国はコンゴ民主共和国よりはるかに小さく、非常に小さい面積しかない国です。大きな隣国の影に隠れるように存在するのがこの国です。コンゴ=ブラザヴィルはカナダ教区に属し、マーク・ウォル教区使徒の指導を受けています。

コンゴ共和国には三つの主要な地域があって、それぞれの地域に教会があります。ポワントノワールは最西端の大西洋に面する港湾都市です。ドリシーは南部の内陸にある都市です。そして首都でもあるブラザヴィルはコンゴ民主共和国の首都キンシャサからコンゴ川を跨いだ対岸にあります。コンゴ川が国境になっているため、国境間の人や物資の往来は盛んです。国境を超える人や移民をする人はたくさんおります。

特筆すべきは、シュナイダー主使徒が2013年にドイツのハンブルクで行われたペンテコステ礼拝において現職に任命されて、初めて訪問したのがこのブラザヴィルでした。日曜礼拝のために特設したテントに、1,680名が集まりました。この礼拝においてシュナイダー主使徒は、コンゴの牧会責務をフランク・ズール教区使徒補佐に代わって私に委譲しました。彼も私も、カナダ教区のウォル教区使徒の下もとで働いております。

主使徒はヨハネによる福音書 15章 26節の言葉を引用しました「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。」



一列目左から：デグビア使徒、チセケディ教区使徒、ヌサンバ教区使徒補佐、ウォル教区使徒、シュナイダー主使徒、ソボトカ教区使徒補佐、カララ使徒。二列目左から：ウィンギ使徒、ムベレ使徒、ダコウア使徒、ムボロデ使徒

この聖句で言おうとしていることは、聖霊は様々な方法で主について証しをすることによって私たちを強めて下さる、ということであります。聖霊は、私たちがイエスから選ばれたことを、絶えず思い起こさせて下さいます。このことを私たち信徒は特に意識します。もし主と出会うことができなかつたら、私たちは別の場所で生まれていたことでしょうか。教会員は選ばれたことの恵みを、しっかりと認識します。ジャングルの奥深くまで主がわざわざ足を運び、選んで下さったのです。このことに深い感謝の思いがこみ上げてくるのは当然のことで、この強い思いによって、主と救いの業とに尽そうという思いが強くなります。こうして、教会員は多くの人たちの素晴らしき手本となることが出来ます。真心から主を愛し、純粋にこの愛に促されて、主のためなら何でもしようと思うのです。

ハンス = ヨアヒム・ソボトカ各教区使徒補佐。1956年9月15日生まれ。2003年12月2日に使徒に就任。一年後、カナダ新使徒教会における教区使徒補佐の指名を受ける。カナダ国内の一部教区に加え、コンゴ共和国、チャド、ルワンダ、中央アフリカ共和国、さらにカンボジアとネパールにいる教会員の世話をを行う。

新使徒教会 教理要綱(抜粋)(7)

7 牧会宣教職

「職務」を意味する英語の Ministry には、「公職」「(政府の)省」「(大臣の)職務」「牧師の職務」という一般的な意味があるが、ある特定の責任分野を担う職務もしくはそれとして正式に認められた立場を指すものと考えることができる。これを広義に捉えれば、ある集団を代表し、先導し、秩序をもたらすために与えられた権威である。牧会宣教職の職務を行使するという事は、運営上と職務と権威としての職務の両方を行うことになる。

日本語の「牧会宣教職」は「教役者」と同義であり、魂への配慮と福音宣教とを任務とする職位の総称である。ここでは基本的に、霊的職務を表すものとする。

7.1 牧会宣教職と任務

霊的職務の執行とは、キリスト教会における奉仕の任命を通して権能を与え、祝福し、聖化することである。これは聖霊の力によって行われる。

霊的職務は、上役の立場にある者、つまり遣わす者がこれを執り行う。遣わされる側の者は、与えられた職務命令の遂行に関して責任を負い、遣わした者に対して報告義務を負う。牧会宣教職は常にイエス・キリストとイエス・キリストに遣わされた使徒たちと繋がっている(7.6 参照)。

キリスト教会においては、牧会宣教職と、福音宣教や信徒の利益に資する様々な任務とを、区別する必要がある。こうした任務は牧会宣教職と違い、叙任を受けずに行うことができる。

さらに、すべての信徒に与えられている召命すなわち主に従うことによる主への奉仕との区別をすることが重要である(ヨハ 12:26; 一ペト 2:5, 9)。使徒たちが言動によって福音を証ししているように、再生を果たしたキリスト教徒も使徒との交わりを通して、福音を証して、大宣教令によって働く使徒たちを補佐しているのである。

7.2 教会の牧会宣教職の起源

霊的職務は天の父によってイエス・キリストが遣わされたことを根拠としている。イエスは王であり、祭司であり、預言者である(3.4.7 参照)。人類を贖うために、天の父から遣わされたお方として、権威を受け、祝福を受け、聖別を受けられたのである。

すでに旧約の頃から、教会の牧会宣教職に先駆けるものが存在していた。しかし旧約の職務と新約の職務との間にはかなりの違いがあった。これについてヘブライ人への手紙 8 章 6 節では次のように述べている「しかし、今、わたしたちの大祭司[イエス]は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。さらにまさった約束に基づいて制定された、さらにまさった契約の仲介者になられたからです」。

イエスは、使徒をお遣わしになり、御自分の教会のために牧会宣教職を制定されたのである。

イエス・キリストの教会はペンテコステの日に歴史的登場を果たしたことにより神から啓示された。この時に、霊的職務としての牧会宣教職も教会内で機能し始めたのである。牧会宣教職そのものはすでにイエス・キリストによって使徒たちに与えられていた。その牧会宣教職に対して、イエス・キリストは、その職位に権威を与え、祝福を与え、聖別をされ、聖霊の賜物をお与えになったのである(ヨハ 20:21-23)。使徒はイエスによって遣わされてきた者たちである。

7.3 牧会宣教職制定に関する聖書の記述

聖書には「牧会宣教職<教役者>」に対して統一した定義づけがなく、牧会宣教職に関する教義の解説も一切ない。しかし牧会宣教職の内容や性質について取り上げている箇所はいくつか見られる。

7.4 使徒職

「使徒」を意味する英語の "apostle" には「大使」という意味がある。この語は、新約聖書に対応する意味を持つ、ギリシア語の「アポストロス ἀπόστολος」が語源である。

イエス・キリストが御自身の教会に与えられた牧会

宣教職は一つだけである。それが使徒職である。使徒職は、イエス・キリストの代理として、キリストから委託を受けた者である。使徒の職務とは、教会を建て、救いを待ち望んでいる人類がイエス・キリストによる贖いに与えるようにすることである。さらに、イエス・キリスト再臨のために信徒を整える職務が、使徒に与えられている。

使徒職の意義については、新使徒信条第四条で次のように述べている「私は、主イエスが御自身の教会をお治めになること、そのために使徒をお遣わしになったことを信じます。そして御自身が再びおいでになるまで、教え、イエスの御名によって罪を赦し、水と聖霊とによるバプテスマを授ける職務を、使徒にお委ねになったことを信じます」。

7.5 使徒職から派生し発達した牧会宣教職

イエス・キリストが制定した牧会宣教職は、使徒職だけである。使徒たちはペンテコステ以後、会衆が成長の一途を辿る中で福音宣教の任務遂行に着手し始めた。程なくして、職務の増大に対処するために補佐役の必要性が顕在化した。そこで教会は七名の人物を選んだ。使徒はこの七名に按手と祈りを行い、職務に必要な霊的準備を施した(使6:6)。この七名が最初の執事となった。このこと——使徒が按手を行い祈りを捧げたこと——をきっかけとして、その後における任職のあり方が定められたのである。

使徒団や信徒たちは霊的配慮を必要とする新しい教会を設立していった。そのため使徒は、「監督」(ギリシア語の「エписκοποι ἐπίσκοποι」)あるいは「長老」(ギリシア語の「πρεσβυτεροι πρεσβυτεροι」と呼ばれる、教会を代表する立場の者を任命した。「長老」も「監督」も同一の牧会宣教職であったことは、テトスへの手紙1章5,7節から明らかである。さらに初期キリスト教会では、預言者、福音伝道者、牧者、教師も活動していた(エフェ4:11)。

牧会書簡やディダケーによれば、教会の発達に伴って、教会生活が霊的であることを保証するために、職階制度が、聖霊の鼓舞によって導入された。

しかし初代使徒たちの死亡によりその職務が途絶えると、委任されていた霊的職務は、様々な任務や方向性へと発展していった。

7.6 新使徒教会の牧会宣教職

新使徒教会は、その設立当初より、牧会宣教職の教会であると考えている。使徒職によって導かれる教会である。

すべての牧会宣教職は使徒職から生まれる。これについては新使徒信条第五条で次のように定めている：

「私は、神によって定められた教役者が使徒によってのみ任命されること、牧会宣教職に与えられる権能、祝福、聖別は使徒職からもたらされることを信じます。」

現在、新使徒教会の牧会宣教職には三つの職階があり、それぞれが異なる霊的権限を担っている：

使徒職

主使徒、教区使徒、使徒

司祭職

監督、教区長老、教区伝道師、牧者、伝道師、牧師

執事職

執事、執事補

7.7 任命

牧会宣教職は、会衆で働けるようになるために、使徒職から権威を与えられ、祝福を受け、聖別される。

霊的職務への任命は、使徒が三位一体なる神の名によって、按手と祈りを通して執り行う(12.1.12参照)。牧会宣教職は自分の職務行使に当たって、使徒職に説明責任があり、使徒職の判断の下にある。

任命を受ける中で、教役者としての能力が与えられ、それに応じた権威が使徒職から与えられる。これは執事職、祭司職、使徒職すべて同様である。これを土台にして、牧会宣教職は課せられた職責を全うすることができる。

牧会宣教職は、任命を受けることによって、自分の仕事に対する祝福と聖別とを受ける。必要な能力が引き出され、それが職務の行使に生かされるのである。

任命は聖礼典ではなく、祝福行為である。祝福行為が聖なるものであり、牧会宣教職が奉仕の職務であることは、その職務を与えられるときに膝をつくことから理解することができる。牧会宣教職に任命される者は、絶えず神に忠実であり、キリストに従って行くことを誓い、使徒職への信仰に従順であることを約束する。

原則として、牧会宣教職に就くことは人の意思ではなく天の御旨に基づいている。神の御旨を理解し、それに従って行動することは、使徒の任務である。

任命を受ける際には、天からの祝福が与えられる。この祝福により、天使による加護に与るだけでなく、聖霊が強め支えて下さることも保証される。

牧会宣教職が任務を行う場合、自分自身の能力ではなく、専ら使徒との一致と聖霊の力に基づく。使徒職は、教義についての権威者であり、他の牧会宣教職が神の御言葉を宣べ伝える際の模範である。

7.8 牧会宣教職の職務行使

牧会宣教職はそのふるまいや霊的権能において、一定の要求を満たした生き方をしなければならない。つまり、任命を通して受けた聖別を実践して、牧会宣教職に与えられた賜物が会衆の祝福として開花されるようにしなければならないのである（一テモ 3：2－3, 8－9）。

牧会宣教職に召された者は、神を愛し隣人を愛する思いから奉仕をする。イエスを手本として、自分が神の指示で動く者であることを自覚する。

教会員と牧会宣教職との信頼関係は、会衆が祝福された発展を遂げるための必須要件である。こうした信頼関係を構築・維持するためには、牧会宣教職と使徒とが一つになることが不可欠である。

牧会宣教職は、与えられた権威の範囲内で職務を行う。そのために使徒から委託を受けている。使徒は牧会宣教職に、彼らが行う分野の仕事を割り当てる。

原則として、引退した段階で職務遂行の任は解かれるが、職位は残る。一方解職や免職の場合は、職位も失う。

7.9 牧会宣教職の任務

使徒パウロは次のように書いている「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人

一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」（一コリ 12：4－7）。このように、牧会宣教職は、一人ひとりがキリストの福音を歪曲せずに宣べ伝えたり擁護したりする任務を与えられた、神の僕である。牧会宣教職は自分に委託されている教会の教会員を配慮し、教会員の信仰と知恵の成長を促す。魂の世話をする時は、その魂が個人的に抱えている問題に理解を示し、その魂と共に祈り、日常生活で負っている重荷を共に担うのである。牧会宣教職は会衆の模範である。牧会宣教職は、次の事柄を実践すべきである「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考えなさい」（フィリ 2：3）。

各牧会宣教職に与えられている様々な種類の賜物を以下に示す<ここでは省略>。これらの賜物はすべての牧会宣教職に与えられているが、具体的な表れ方は様々である。

7.10 指名

指名とは、ごく限られた職務の担当を配置することである。これは任命とは異なり、職務の期間も場所も限定されている。

牧会宣教との結びつきにおいて、「指名」は、会衆主任者や教区主任者、教区使徒補佐、主使徒補佐への指名をいう。通常は教会で指導的役割を果たす牧会宣教職によって、礼拝の中で指名が行われる。これは、一般的な牧会宣教職の任期を適用せず、その活動の終了が任期の終了となる。

会衆や教区における様々な職務を遂行するための指名は、兄弟姉妹双方に対して、牧会宣教とは別に行われる。

このようにしてある職責の指名を受けた者は、牧会宣教職と同様に、ボランティアによる教会奉仕をするのが一般的である。